

# 米子発の技術 インドへ

## 「大成工業」開発の汚水処理装置

生活排水処理施設設計

・施工「大成工業」(米子市米原6丁目、三原博之社長)が開発した無電源・無放流の汚水処理装置が、インドの大学寮の生活排水や公衆トイレの汚水の処理に導入されることが決まった。「米子発」の技術が、インドの衛生問題解決に向けた「普及・実証」のステップに入る。(井上昌之)

## 公衆トイレや大学寮に導入

JICAの実証事業で

インドではトイレの普及が進んでおらず、汚水の処理も不十分なため土壌や水質の汚染、健康被害などが問題となっている。

国際協力機構(JICA)の「中小企業海外展開支援事業」普及「実証事業」に採択



汚水処理装置で処理水を土壤に染み込ませる役割を担う「タフガード」=米子市米原6丁目の大成工業

同施設は、日本古来の「肥だめ」の原理を活用し、自然浄化力を生かして処理する。汚水を消化槽で前処理した後、畑や花壇などの下に埋設した浸潤散水処理資材「タフガード」の中に送り込み、土壤に染み込ませて蒸発させる仕組みだ。管理が容易で、電気や放流が必要ないのが最大の特長。現地パートナーの企業「TAR

され、人口がインドで最大のウツタル・プラデシュ州のシユリラム大(ムザファルナガル市)の寮のトイレの汚水と厨房、シャワールの排水の処理、ガンジス川流域の公衆トイレ(バラナシ市)の汚水の処理に、同社の「TSS汚水処理施設」が活用される。

A」が運営する。実証期間は2年半。三原社長は「核の部品は日本から輸送するが、大部分は現地調達が可能。インドは国策としてトイレの整備を進めており、ニーズは

## 栽培キットを鳥取の「緑工房」

### 鳥取の「緑工房」



栽培キットとして売り出すキクラゲ菌床を手にする河村代表

キクラゲ菌床製造販売の「緑工房」(鳥取市河原町長瀬、河村雄太代表)とコンサルテ

ィング業「ダブルノット」(米子市角盤町1丁目、高林努代表)は10日から、自宅でキクラゲが育つ栽培キットを緑工房の通販サイトで発売する。国内でわずか3%しか流通していない国産キクラゲの味や収穫の感動を味わってもら

うと企画した。

キットは高さ約28センチ、直径約12センチの円筒型の菌床。霧吹きなどで水を掛け育てると、約2週間で最初の収穫ができる。菌床一つから50〜100個のキクラゲが4、5回は取れる。栽培用ドーム付きが2700円、ドーム無しは1620円。また両社は、栽培キ

ットやキクラゲを返礼品とするクラウドファンディングも始めた。20日までに50万円を目標に資金を集め、菌床見学のイベントの経費などに充てる計画。河村代表は「キクラゲがどのように育つか、まずは栽培キットで収穫の感動を体験してもらいたい」と語った。

米子市西福原4丁目

多くの専門技術者が立ち寄った県産業振興機構の共同出展ブース